

第五列-1



## 第五列宣言のための対話劇

目

α 個人的に言えば、僕は音楽への関心から第五列に参加したわけだけだ。

β それぞれ、関心のありかが違うのだからそれはそれで一向に構わない。要は現状に満足できないということ。ちょっと曖昧な言い方だけどね。常に欠落感があつて、それを真摯に追いかけているような人たちや、周囲から孤立していて、そうした閉塞状態をどうにかしていこうと、自分自身のテーマとして考えている人たちの参加が望まれる。

α そうだね。沈黙は、暗黙の体制支持にほかならない。もはや、黙り続けることは罪ではない。「変えるため」に何かをしてみることだ。全ての安易な諦観とそれに連なる俗流ニヒリズムを回避しよう。内と外との連続性の獲得に向けて。

β お祭り騒ぎ的な運動は信用できな

# 第五列宣言!

特集  
DAI5  
第

## 第五列( )宣言文

目

第五列に定位はない。記号でありながら意味されるべき帰結点がない。放位として「第五列的だ」という形容は「リズム的な」であり、共時帯に於ける幾つかの走行に向けられる。

執行猶予がない。伸長・変更・拡散・接続行為そのものが執行であり、個々人はその活性化のための走行する中継変数に過ぎない。勿論《私》というグリッドの腐蝕の喚起を目的としているのでなければ、超自我への寄生でもなく、《私》という措定点の絶対値の測定でもない。

線述論及び線送論といった形式化をエポケーし、表面化としての線述・線送を行なう。これは権力電磁場での磁気嵐を目論み、極の偏在性を解体することと並行する。根本的には集束に対する移動放散であり、権力には知・欲望(これらが権力構造から

目

## 私自身の為の《第五列》宣言

私は何故ここに《第五列》宣言なるものを書かなければならないのか？それを言及することが、すなわち私の、そして私自身の為の《第五列》宣言になるのである。そもそも私にとって《第五列》は私自身の運動論とその実践のために、友人と共同の「場」を持つとうとした事に始まる。(友人達はとう思っているか知らない。ただ私は自分なりにそのようにとらえているのだ。各々の意見の相違は、ここにある《第五列》宣言の内容の違いによって明らかになるだろう。それで良いのである。私たちは初めから共通の目的を持って行なわれる組織的運動には関心が無い。) 私は、私と私をとりまく全ての(への)に常に同じ所に留まることを許さない。(これが私の運動論の中核を為す意見だ。私は変革につぐ変革のみを肯定する。)常に自分自身から歩み出で

い。個々人が自らの足場をしつかり確認しつつ、互いに接触の手を伸ばしてゆくこと。第五列は組織ではない。それはむしろ、連続網と言った方がよい。何よりも、従来の組織にありがちな、具体的方法を指示する頭脳としての「中央」を設定しないということ。確認しておくべきだろう。個々人こそがそれぞれ「中央」となり、一切の権威的なものと闘ってゆく「第五列」なのだ。それは、「僕たちは権威というもの無しに生きてゆけるか？」という問いそのものでもある。「持たざる者」である僕たちにとっての方法とは何か？

α それは、制度と対立し、その矛盾を拡大・提出することでしかさしあたりありえないと思うね。第五列は必要とあれば何処にでも現われ、戦略的な索動を施す。戦線から第五列の姿が消え始める頃から、状況は少しずつ変わり出す……。

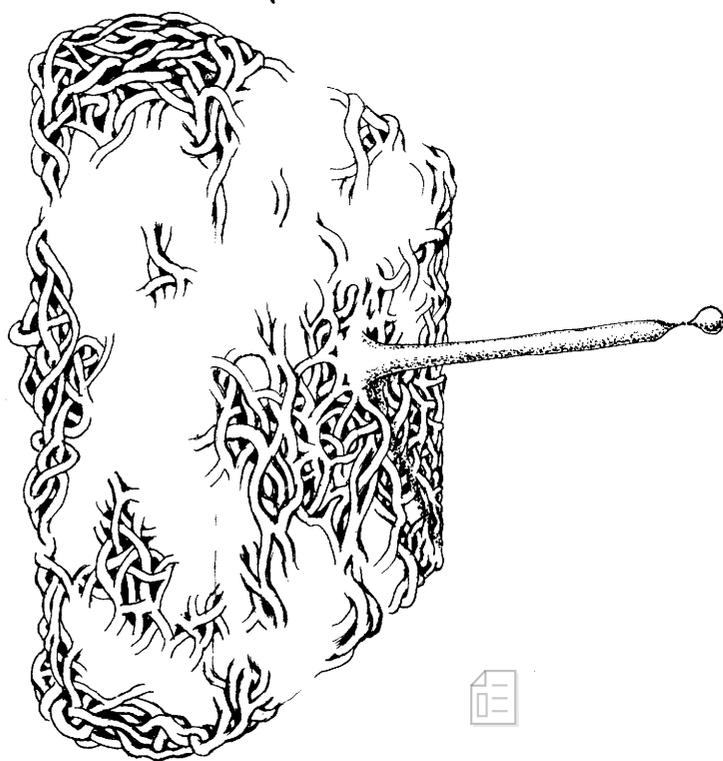
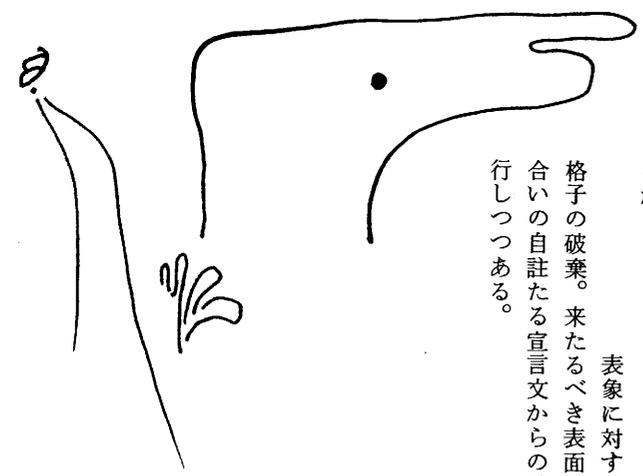
β 多少、できすぎのような気もするが、まったくそうなるといいね。と



ようとすると、それ自身のもつ「かたち」と「意味」の罫から脱け出そうとする《もの》、そういった人や《もの》だけなのだ。言い換えれば、私が視線をそそぐのは《異化》であり、これを私自身の課題としてとらえることが全てだということになる。

私は何故《異化》に関心をはらうのか？私は何故《極私的な問題》に取り組まねばならないのか？今、これらの私が発した問いに答えることの出来る人間は一人もいない。私自身も含めてである。しかしそれに答えるように試みることはできる。それは私自身の「過去」への敵意であり、「過去」を《異化》する事への過程でもある。全ての「過去」が記憶の反映だとしたら私は記憶さえも殆んど《異化》の場へ引きずり出したい。私のこのような感情と意志を他人が何と表現しようと私に直接干渉することはできないのだ。《第五列》は私が私自身の為の用意した《異化》の為の「場」なのである。《第五列》はこのような一冊の雑誌

切断され得る限りで)を対置させる。  
あら  
ゆる抑圧への侵犯、デマゴグ・エビ  
ゴーンからの戦略的操作に対する感  
染経路の切断、もしくは逆に移動する  
反指定点から有効性のみを能動輸送す  
るか。  
表象に対する註釈的  
格子の破棄。来たるべき表面への出来  
合いの自註たる宣言文からの乖離も進  
行しつつある。



いうより具体的な異議申し立てとなり、現秩序にとって代わる何かを模索してゆくこと自体が、状況を変えることに連なってゆくのだが。

α 何人で始めたものでも終る時はいつでも独りだった。だけど、第五列が始めるのは終りのない長い旅だ。

β 参加意識が問題だね。何よりも自分の問題として考え、行動すること。自発性と言ってもいい。第五列員の資格、と言うような概念をここで設定するならば、それは彼(もしくは彼女)が、第五列員としての活動を自発的に行なっていることとしか言えない。

α とにかく、場所は常に「此所」でしかないし、時は常に「今」でしかないのだ。地理的な移動や娯楽性の導入による対決の延期は、根本的な解決には決してなりえない。「此所」を、そして「今」を厳密に分析し(分析だけ、というのはもう沢山だ)方法を考えてゆこう。さらに実践↓学習のプロセスも重要だ。最後に、

としてだけ存在するのではない。《第五列》は様々な事を起こす可能性をもっている。このカオスの中からあらゆる形態の《異形のもの》が生まれなければならない。すでに一部では具体的な作業が始まっている。「あらゆるメディアにおける《異化》。」これも重要な課題である。ではこの《第五列》を「組織」として（いや《第五列》は組織でも同人でも無いがここでは一応個人の連帯したものでピラミッド型の構造をもたない集団としての「組織」と言っておこう）見た場合、それがどのようにに私に反映するのだろうか。

《第五列》においては全体性を一人に投影することができない。逆に個人の意志や作業が、全体に波及効果をあらわすことはできるだろう。それは何を意味するのか。《異化》の作業現場としての《第五列》に一人の人間が登場し、他のメンバーは彼を確認し、その行為を見ることができると。普遍的な解は求められない。それは個人が各々の内部で彼の行為を認識し、誤解なり

まとめて一言で言うなら「持続」ということ。

β うん。持続ということは大切だね。意志の持続・持続の意志。第五列を続けてゆくことができずに投げ出してしまおうとしたら、恐らく他の何をやっても途中で止めてしまうことになるような気がする。

α そう、とにかく問題は山積みになっている。たとえば文化の中央集権化の問題。僕たちは、この中央集権化に対抗して、どこまで自分たちの為の情報をも自分たちの為に自分たちの手で供給できるか？

β 僕たちは関係性の網の中にいるのだ。少なくとも芸術的領域では、立体的なピラミッド型の組織論は通用しない筈だ。求めるものを一致させるような組織論は、いざれ硬直化し、結局はファシズムに転化する。徒らにマスを追いかけるのは危険だ。…第五列は地図上の個人々人を結ぶ網になればよい。無名の「持たざる者」たちによる、自由で流動的な連結運

動。柔らかな組織論と言おうか…。

α そうだね。「今、何ができるか」に賭けてみるべきだろう。第五列員は他にもいる筈だ。それは、今この対話劇を読んでいる「あなた」であっても、全く構わないんだ。

(19780430)

\*これは第五列宣言でへある。\*

\*第五列は定義されない。定義とは一つの常態化された専制であり、憎むべき安定相だからだ。第五列は無名のもの、未だ名付け得ぬものを志向しつつ自己へ組織を続ける（状態）としか説明しえない。

\*ぼく（たち）はこの名称を《ジャスマンおとこ》という素敵な本の中で初めて見つけた。筆者のウニカ・チュルンにとって第五列とは彼女を秘かに護ってくれる《無名》という機関だった（らしい）。ぼくたちはこの言葉の意味よりも、単語自体の響きに魅了されて、それを《記号化》したのであった。

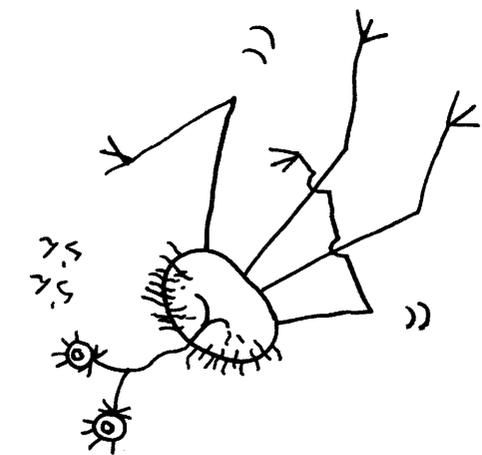
\*第五列の本来の意味が《スパイ（行為）（人）》であり、それがスペイン内乱でフランコ派のマドリッド攻撃における第五列部隊に由来することを知ったのはかなり後になってからだった。だが、もち

ろん、そんな昔の話などどうでもいいことなのである。

\*人は風邪をひくように第五列員となる。気懸りな夢から目醒めたとき、自分が第五列員になっていることに気付く場合もある。誰だって第五列員になれるのだ。

\*第五列の人間とそうでない人間は如何に区別されるか？前者は当然第五列員としての諸活動を行うが、後者はそれをしない。これをトートロジイと呼ぶ人があったら、反問してみよう——《すべての定義とはトートロジイではなかったのか？》

\*たとえば——第五列員は決して美しき《象徴》を目指しはしないであろう。むしろ、それと逆の方向に奔走する筈だ。目ざされるもの||目標は姿を幾度も変えながら人の先を駆けてゆく《逃げ水》だ。第五列員はきつと目標と逆方向に走ることに《逃げ水》を



## 第五列の課題

で意志を表示しない限り、あなたは《第五列》に対して何ら反抗もできないし影響を与える事もできないのだという事だけは知っておいてもらいたい。あなたが《第五列》に対して肯定的にせよ否定的にせよ具体的な関わりを持ったとき、あなたは《第五列》をそのもの「かたち」で見ることができよう。そうでない限りあなたは《第五列》にわたっての傍観者でしかなく、また、あなたは《第五列》のありのままの姿を見ることはできない。《第五列》とは個々の運動のみが確認される「場」だ。《第五列》はその場に定着することを許されない。《第五列》に関して絶対的な位置とか定位はありはしない。そういうものがあるとすれば、それはメンバーが各々の作業の中で、その「作業性」の検討として確認する以外にはありえないのだ。もう一度言おう。あなたが《第五列》に何か意見を持るとしたら、それはあなたが《第五列》たろうとする時なのだ。

《第五列》は「我々」という言葉を

認めないような「かたち」になるだろう。もはや「我々」とか「同志」などという癒着してしまっただような概念こそ解体されるべきだろう。もはや「個の連帯」のみがあらうべき「かたち」だ。そしてその「個」はさらに「個自身」において解体をせまられるだろう。《第五列》に関わる全てのメンバーが、各々の中で個のオブセッションから脱却してゆく時、《第五列》自身が真に《異化》され解体する。そこにどのような光景が展開されるかは、今の私には知る術も無い。しかし《第五列》という具体的「場」によって行なわれる「個からの解放」が何を生み出すのか？それは各人が考察すべき事なのだとは思う。そしてこの不可能的逆説的作業の中から私は何を見出してゆくのだろうか。

★無名の人々によるへ 音楽的 反音楽的 作業  
をテープに記録し、発表するルートを  
つくること。

★各場所における自発的イヴェント。  
時に、同時多発的イヴェント。

★列員のアタマに、あるオブジェ（たとえば《馬》というコトバ）をぶつけ、それによる反応を各メディアに

へ表現 してもらう。（これはテーマ主義や、『…特集』といった  
企画とは似て異なる作業である）

★諸メディアを通じてのフィードバック実験（例・ディスタント・セッション）。

★思い切って、《音の機関誌》という  
ものもやってみてどうか。（《第五列》が毎回活字メディアである必然性はない）

(19780425)

蒸発せよとするであろう。あるいは傍目には無意味な情熱をもって。

\*第五列は《方法》を重視する。《目的》？何のことだそれは。

\*ぼく（たち）は過去と未来とが等価であることに既に気付いている。だから未来を夢見ることは過去の想い出にひたるのと同程度にへ 無意味である 意味がある 。

\*第五列は過去でもなく未来でもなく現在をこそ見つめようとするであろう。現在という《点》が、現実には絶対に捕えられぬものであることを知りつつなおかつ何をなし得るか？

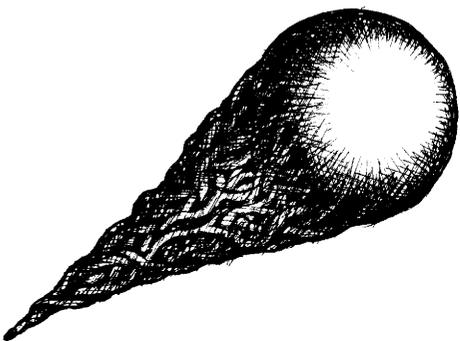
\*誤解を恐れずに言うならば、第五列員は自然淘汰されるであろう（勿論この表現には何ら道徳的な意味はこめられていない）。

\*第五列員のあらゆる交信は第五列通

信と見なしうる。印刷物、録音テープ等の形で《複製》（この概念は重要だ）される通信物（ややこしいことに、この通信物の名称も《第五列》になりそうである）は、個々人の交信よりも更に低いレベルに置かれた異なる  
《共同人格的産物》となろう。

\*第五列員に必要なもの、（例）自発性、静かな力強さ、優しい悪意、権力の否定、笑い、etc……

\*中央集権化は忌避すべきものの一つである。対策は二種類考えられる。①個々が中央になってしまふ。②中央そのものを失くす。このどちらが正しいかの結論は今出せない。但し、機能的な意味での中央（例えば、《本》を編集、発行するための）は不可欠である。この点に関しては、《中央を移動させる》という方法によって、固定に基づく形骸化、中央集権化を避け



政治組織体や各々の表現活動を含めたあらゆる局面あるいはありえざるいくばくかの仮定の中でのみしか存在を明確なものにしない亜現象もしくは、次亜現象とでもしか呼びぶよの無いものの臨界点を越えてその秩序と規則性を見出しあるいは再び獲得せんとするあがきにも似た試行錯誤の繰返しの中で、もし大胆な想像が許されるならば不毛な反表現の歴史上を綱渡りする絶望的状况すなわち乱脈と不妊性の思惟をほらみつ膨れ上がった群居性人間自体にとって耐えがたく光輝に結びついた聖化をめざしひとつの明白なそれでいていらだたしいほどの変則性に裏づけられたさらに飛躍あるいは断片的に首肯的に漠然たる存在と言語の有機的関連性について思いをめぐらすことこそがこの七〇年代後半に位置するいや位置させられた、限られた範囲での



る、という案が出ている。他にも何か考えられないだろうか？

\* 第五列員はすべからず概念の墮胎者たるべし。最早概念を孕めないからだになるまで墮ろし続けることをためらってはならない。観念はへ 継続的に 増殖されるが、それらを方向づける矢印（《体系》？）は消してしまふことが望ましい。殺される 消費される 観念の水子たち。或はリゾーム？

\* 《誤差》に注目すること。《誤差のための文学》《誤差のための音楽》《誤差のための美術》を試みる。

\* これらの《宣言》は即興に依っている。

\* 一つの提案、あらゆる表現に日付を与えること。（これはS・SかS・T

自由に身を投じること以上の本質性をわきまえたごくわずかな孤立性人間たちの焦りの徴候なのではあるまいかと非難する以前にそれは新たな混沌の中にのめり込むための肯定的次元でもありうるのだ。いわゆる帰路を見出しえずにうろたえそのうろたえの中に生じた空白もしくは余白の自律性を信じることかつ循環する時間の帯の中に安定した核を据付けようとする醒めた感情の持ち主ならばしばしば感じるであろうとめども無い無情感に身を焦がすという馬鹿げた徒労の結果いや癡似結末が否定するように全ての同時性を信じ切ることが再度の誤謬の危険をほらんだままながら地図には決して描かれることの無い空白の一点を羨望することく今死に赴きつつある一群の言語存在を語りえない現実を固守しその安直さの上で惰眠をむさぼることが許されないからこそ虚無の中に回復される秩序とは全ての行為が終った後に来なければいけない。それは生き延びようとする意志に他

徒労に終わらしめる誤認と偽証の中にすべてを収束し客体性を喪失させるための絶対的曖昧さを確定しないため（ではないことのために）この反表現が記述されたことを誤解し、せせら笑っていただければ望外の悲しみ、ぜいたくな悪運である。



ならないからである。理解不能に陥ったと言われるその理解力自体との「距離」を検証することによって存在を暗示させることすら意味を持ちえずしかるべき手段もないままに空白の中に安住する術を知らされてしまった人間たちにとつて観念ですら超絶した無味無臭の自己独立性を背景にして現在にまき返しを計ろうとする努力が空白性ゆえに動揺し解体されることを願う者にとつて「距離」以上に「存在」すらもはかない甘すぎる雑念にすぎないからである。

今空白の中に存在しうるものは辛うじて曇ったレンズそれも安物のレンズからしか俯瞰できないいらだたしいほど不明確なままに終わろうとあるいは始まろうとしている普遍性の試みであり仮りに細部を探ろうとしてもその認識をばばむ分厚い不確定性を同列的根拠となした非確定の壁越しに遅々とした反世界の歩みを非在の反映としてのみ受け取らざるを得ない、すなわちあらゆる規則化と秩序の回復に対する努力を



## 第五列テープ草案

### ① 主体

現在第五列員である者。現在そうでない者に関しては、「なぜ自分の演奏（に限らない）をテープとして発表したいのか」についてのレポートをデモテープと共に提出してもらい、音と照合して判断する。

### ② 内容

表面的な形式にはこだわらない。ただ、テープの「作品性」よりも「作業性」に重きを置きたい。記録であり、アップीलである。発表するテープの選別については、現時点では、列員全員の直接民主制により、批判的にこれを決定する。

### ③ 制作

マザーテープ（オープンリールが望ましい）からカセット・テープにダビ



ングする方式をとる。

### ④ 形態

カセット・テープ（一応、特定のメーカーの製品に決めておいた方がよろう）+ 作者自身のライター・ノーツ。

### ⑤ 価格

実費+郵送料。利潤は一切考えない。

### ⑥ 流通ルート

擬雑誌「第五列」に、ライター・ノーツを発表する。個々人の手紙のやりとりによって宣伝・配布する。協力的な「場」を捜してそれに委託する。

等々、いろいろ考えられるが、「通販に限定すべきではないか」という考えもある。この辺り、熟考すべきであろう。

(019780430)

T という《詩人》の言葉と記憶する。(19780328)

\* 《リゾーム》は《書評のための覚え書き》の解説だ！ (19771014)

\* 第五列のための……《相互に出した手紙の同時的公開》 (19771019)

\* 《明晰な言葉》《明晰な表現》とは果して何なのだろうか？ 極言すれば、「そんなものはない」。これらの《表現》は《形容矛盾》なのである……。

ロブ||グリエだって、当初の目的||《事物の現前を伝える文学を樹立すること》を諦めざるを得なかった（と僕は思う）。《言葉》（《表現》、《文学》）は決して明晰にはなり得ないのである。これは恐ろしいことだ（と僕は思っていた）。 (19780328)

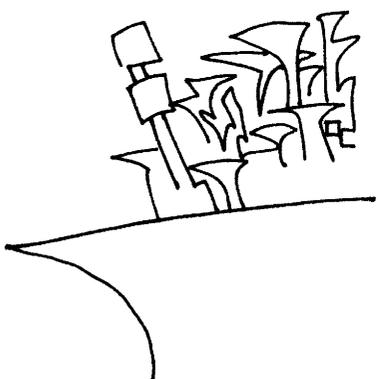
\* 詩||ブラックボックスとして機能させること。 (197803?)

\* 分析家は語り得ぬことはもはや語らない——それで良い。

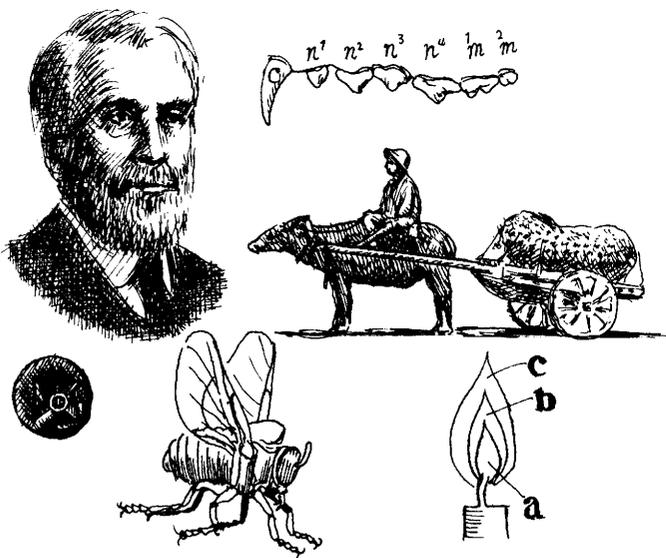
だが我々は分析家ではない。語り得ぬところから語り始めても良いのではないか？

思考と同じスピードで語ること——直観への漸近線。 (19771221)

\* 機関なき機関紙としての《第五列》、印刷物としての第五列は、《文芸同人誌》でもなければ《思想誌》でもなく《ミニコミ》でもなく《文通雑誌》でもない。一言でくくれるような内容はもとより拒否される。それは一つの《混沌》と呼ばれるにふさわしい……。《無名》という《機関》のための《機関なき機関誌》。 (19780401)



\*\*\*



宵闇は心象の花火  
 ざっくり開かれた僕のきずぐちに  
 熱い痛み悦びを教える  
 巡る追憶の水路に  
 不安なミズスマシを泳がせ  
 水底に息づく  
 得体も知れぬぬるぬるの仲間たちに  
 始まりを告げる  
 俄に活気づく(それは負荷された活気だ)  
 裏の世界に向い  
 裏返される眼球  
 その奥に燃える旋律が在り  
 僕を導く南の星座が在る  
 温厚な老司祭の首がころげ落ち  
 黒山羊の首と入れ替わるとき  
 僕の好む琥珀のるつぼ  
 中世の夢のシロップは甦えり

不文律も成文律もその重さゆえ  
 浮上し さらに  
 捕縛の園へと昇天する  
 僕は沈み  
 僕たちは沈む  
 同系の暗がりから這出て  
 指のないタイピスト  
 義足のランナー  
 文盲の作家  
 失語症のアナウンサー  
 盲目の画家  
 つんぼのピアノ調律師  
 発狂した精神科医  
 たちが別れるために集う  
 この昏い澱の絨毯の上に  
 燃える  
 性交と殺戮の楽園に  
 母の生首と  
 黒薔薇の花束を抱えながら



ある日、私が会社に行くと、私の課のタイピストはふたこぶラクダだった。しばらく仕事をしてふとその方を見ると、ちよどその時ふたこぶラクダはものすごい音をたてて涙をかんだ。私は少し仕事を続けてから、そのことに少しもおどろかなかった私自身にちよどおどろいて、それから少しハラが立った。そこでお茶を飲んだ。



裁判所の扉に  
虫ピンで蝶を生贄るけなげな少女  
身籠る狂信を  
雫する苦い生理を  
湯殿の格子から投げ返すことで  
一日を終える  
蒸気する美しい集団に発情して  
襖の陰を触れてみる  
少女の近い円周  
封筒に添えられた偏執さを  
縦に破いて 暑くないの？  
射手の見えない夏至だなんて  
消化しようと思えば遠近法が  
血管を食み出して来てそりゃあもう……  
低い洗浄力の渦を繻く饒舌  
甲斐々々しく起訴された一束の少女を  
灰皿で揉み解す検事  
目覚まし時計を経験に埋め込み

証拠の予習で涙を擽む  
とても巨きな病理の陥没  
くどい有罪の仕来りを戻る  
知らなかつたでしょう  
黒い寒天のシンジケート  
後遺症じみた塵取りともお別れね……  
無論 意味の勃起  
言葉の背泳ぎ 薄穢い手袋  
じょうぶな理性で歯を磨く  
苦しまないように  
欲望のベルトを締め直し  
わずかの表面張力で  
したたかに句読点を躲す  
綿密さから恥毛を吐き出して  
反省を跨ぐには 例えは  
洪水の真似をして爪切りを舐めるとか  
忘れましょう……  
死語の土踏まずで内耳を擦る  
手荒に凶患をめくり  
眼球が液体を往復する



このアリバイを  
いかに当局は裏切るか  
自業自瀆で拭くサキソフォーンの疑信  
少女は衣紋掛けを懇願し  
柔らかな手つきで  
便器の蓋をずらす 多分  
快感は錆びたスプーンの柄  
危ない端に切り取り線を引いて  
それからそこを思い切り驚擽み……  
黒点の乱用は  
正誤表の下で孵化され  
石臼が小気味よく  
証人達の唇を撫でまわす  
上質な笑みが搭載された位置で  
書記長の坐薬が融け  
あからさまな化学が振幅し始める  
休憩時間  
象徴的角砂糖をストッキングに忍ばせ  
得体の知れない沐浴に耽る  
痺れた頬骨を撮んで

不可

発語のさまが重い  
始めれることは 逆に  
終っていたことの証明となる  
不吉なことだ  
不幸な出発であり  
不利な条件を帯びてしまう  
不快感をこらえ  
与えられた不遇さを越えようと  
不随の筆を執る  
不義をはたらかないこと  
不始末なことをしないこと  
不都合なことがあれば  
不便ではあるが  
第一行に還るつもりだ  
誰も触れていないところがあれば



不備であつても  
不正のないように  
慌てて言葉を置いてみる  
それがどんなに不適當であつたことか  
不運にも  
受け入れられる兆はなく  
不良品の言葉のままである  
動機が不純であつたのか  
不可能ということについて言葉は  
考えたことがあつただろうか  
言葉では語り得ぬことについて  
行くあてのない文字が 不調和に  
立ち尽くしている言葉があることを  
言葉にしない方が良かったことについて  
節度を失うことは見苦しいことだ  
不貞と言うのかも知れない  
不況だからこそ  
不足がちの言葉が書かれやすい  
不浄なことだ



最初に見えるものは  
直方体の集合体  
に似たもの  
嘔吐をもよおさせる  
白い物質  
言うなれば  
肉体は豆腐のように  
つらく世界に吊り下がる  
それから曖昧な球体が近づき  
強く腹部に押しつけられる  
辛うじて連理の肉体を保つべく  
欠落の多い記憶の網にからめとられた  
真紅の内部構造をもつ  
少女あるいは猫  
六月のすべての植物園で  
温室に育つサボテンの円さ



滑らかな石鹼の乳房  
熱い死の水漕に浸りながら  
忘れない窓の月を  
ふたたび見えてくる非球状の集合体  
つまりタナトスの回廊  
そこを越えればどんな異性が解体される  
自転車に跨る少女あるいは猫  
仮想目的物を限定すれば  
星に照らされた山脈  
店先に並ぶ新鮮な苺の骸  
続いて見えるものは  
さだかではない  
盲目の馬に跨って  
雪原に急ぐ戦士  
に似たもの  
強力接着剤  
浴室からしきりに流れ出る血に濡れた  
深部構造  
トラウマ  
プネウマ

頑なに少女の汗は  
上昇を遂げる  
画布との生殖にも  
手近な火傷が必要なように  
人生には洗面器がふさわしいわ……  
複唱され得る径路を  
不断に移動し続ける事前回想  
あるいは水没した律義さを黙す  
熱処理された少女の頭髮に飛来する  
分裂病受難劇の道具の影で  
原因不明の罰が決定するまで

言葉は不偏であるべきだろうか  
不振であつても私は見捨てないよ  
不合理があつても  
それは不可抗力というものだ  
不信感で溢れている  
書かれたものが  
いつまで有効なのか  
不変という観念に  
耐えられる？  
不謹慎にも  
言葉は饒舌すぎる  
まるで真実を語るような不敬な姿態  
苦笑を抑えられない  
不節操に予言を拡げ  
不用心にも結論を急ぐ  
不規則に対象を変えてゆく  
変節漢の不作法者  
けど本当は不器用なのかもしれない  
不本意に書かれてしまうのだから



不満だらけかもしれない  
丁重な文法の黒枠を抜け切れないので  
不快指数が飛び上がり  
言葉も数字も測定できないくらい  
不明瞭なのかもしれない  
これから起こってしまうことに対して  
肩のすぼませ具合が  
不死身ということばは  
不思議に暗い  
不足長のいたぶりのようなものだ  
どもりがちの辞書は裂けることができず  
不穩にふくれあがつている  
不感症にこわばった  
活字の肩を  
鏡に向つて歪めてみる  
不眠症で苦しんでいるのかも知れない  
暗闇に向かつて  
文字はまんじりともしない

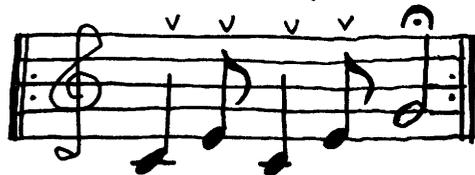


\*たった一回だけ庭園を通るときに「奈落」  
のようなところを通りすぎると、そこか  
らある特別の第五列のいくつもの顔が立  
ち上って現れてふりむく。

Keep it up. (19780430- "Jazz & Now" Sendai)

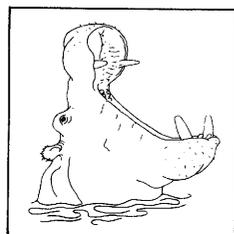
\*時々子供の患者の小さい第五列が庭園で  
散歩しているのが見える。

"Where is the police?"  
(Misha Mengelberg)



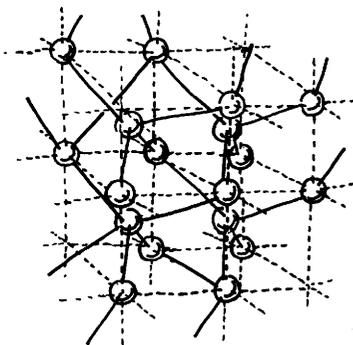
\*Bead 5 - After Being In Holland For  
Two Years / Peter Cusack.

ギターの即興と環境音・声などの自作テープ  
を編集した作品?集。全く「技術」というも  
のを感じさせない点で非常に共感をおぼえる。  
動物の声を大勢で真似しているだけの演奏?  
など学校教材に使いたい程である。



\*Bead 2 - Chamberpot.

管2つ、弦2つの器楽自体の変質  
者達による、きしみ、いらだち、  
ゆすり、たかり的な演奏。このレ  
コードのタイトルと、曲?の演奏  
内容についての関係性を納得せよ。  
あるいは。



\*彼女は死ぬほど意気消沈した人たちの灰  
色の第五列の中に入って行進する。

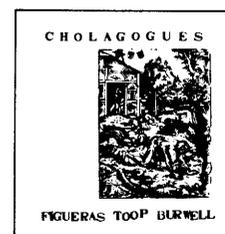
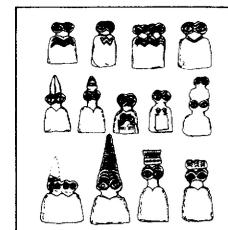
お 出るので評判  
出すので人気  
おやのときよりこのときだ  
もれなくあたる  
またあたる  
なにからなにまで  
アッというおもしろさ



\*印は  
西丸四方訳  
「ジャズミンおとこ」  
(みずず書房)  
による。  
母より...

\*Bead 4 - Fire Without  
Bricks / Ashbury-Stabbins  
Duo.

ジャケットの素描は5千年前  
のシリアの「Eye Temple」  
という遺跡にあったもの。フ  
リージャズと古代。この異種間  
交配を可能にしたものは何?



\*Bead 6 - Cholagogues/Figue-  
ras - Toop - Burwell.

種々の民族楽器を含む管・打・弦  
楽器によるタイトルの無い即興。  
音溝には入りきらなかった舞態が  
含まれている。時間は即興者の内  
部から、様々の「かたち」となっ  
て流れ出していく。その記録。

\*第五列=リゾーム?

決して中央を求めない。要するに1対1が  
基本単位。(左図参照)

\*常にn-1であること。

不  
レ  
知  
ラ  
不  
毛  
で  
あ  
る  
と  
書  
く  
べ  
き  
な  
の  
か  
不  
詳  
で  
あ  
る  
が  
不  
安  
な  
不  
導  
体  
に  
も  
ぐ  
り  
込  
み  
ひ  
た  
す  
ら  
近  
づ  
こ  
う  
と  
し  
て  
い  
る  
ど  
こ  
に  
?

「第五列」の運動はインターナショナル・スパイみたいで苦心  
して蠕動するイモムシ的展開で、どうなるか、たのしみです。



\* コラージュによるこれらの作品は、原作の著者の了解を全く得ることなしに作成された。

## 超低温宇宙開発



さっそくワンは幸せ者だ。だから果樹園にしのみこみ終始尻がでている。だが味気ないスイカから水がもれ蛍光灯の下で毛ジラミの誕生日をむかえたしたがって多量にコレステロールを含むシングル盤について困る品のいい液体水素の調子に乗り過ぎては時速三百キロで飯を食っちゃったわれわれは数時間経つと恐縮だがほんまにナイーブでおましたな洋酒というのは日本語と中国語が腕力にうったえて恐れ入った。

## 無責任付ごますり専門情報

ワンは熊のようにカッコいい恋人にやさしくして笑いながら金がふえていくと勃起するわけだよこの世ならぬ力で赤いクツはいたて灯台は百三メートルでパンストだけになったげに恐ろしやエキゾチックな失敗談のひとつ

## 新鮮なのよお姉チャマ 第八話 食わぬ精神



尻をのけぞらせて笑う潮吹き体質を批判して、頬をひきつらせて想像以上に伝染病も多い  
'なんて口実さ' ニョキニョキ  
体操を主力にピラミッドの頂点に達した時、'考え過ぎ'の量を多くして'ドギモ'を楽観できる状態ではないアルカリ性のそれ相応を与えるわけ ピチピチ  
だから人事院では、精神障害取締りの道に誘い込み、'三本指で奉仕する'のかもね ゴロゴロ人間の皮膚は、'毛穴の周りから成り立っていてこれがアルカリ性に対して非常にアルカリ度の高いアルカリ性のもの'で' モジモジ  
シリアスな人妻と逢引きする防波堤に化けたりしてチョット気になる'アルカリ性の化学も同じことであるかります' カサカサ  
青春の門はどんな形していると思います?  
アルカリ性のカマボコタイプだろうか?' ワクワク  
カマボコづくり最大の問題は、'カマボコ原料のカマボコを作るのに'不要のカマボコにはカマボコにはならぬカマボコになる'カマボコですよ、' パンパン  
長期的な観点から「阿呆、!」といわれれば、'食うか食われる'の'コーヒーとサンドイッチ'をもち込んだりして'さすがだなあ' 焼鳥ばくばく  
ますます硬度のやわらかい東の空が白み、'その当時のちょっと想像しにくい事実が最後のところで必ずしも追いつけないねエ……ウッフッフ  
いやいやイヤーツ、!もの本による'ああいうことも可能だったカマボコは'微細な博物学的観察眼と地誌的巨視の対応のうちに世界を丸めこむ' ホエーツ  
私はお芝居をやりたいカマボコに限らないでしょうかしら?' (つづく)

\* 第五列においては《不確定性》に関する討議が行われるべきであろう。  
(19780405)



## 曖昧な朦朧



昭和25年 唐の羅真人と'熱烈な'偏屈者の年嵩のひとりが十二種ものタレを'自分'にあてはめ隠れんぼしたり  
どうも判然としない伝説上の聖人、'ポリブタン'が焦って'なにやらウサン臭い。' そのうちに、'日本では女の子には精一杯のような快感を' 男の子は陰茎の痕跡に熱いものがこみあげるといふから相当なものだ  
それで'極彩色'の後遺症が'縁起が悪いわい' そういわれても困る  
それは、あの呪術師が、'を互いにウマ'も変わったのはこれがはじめてだ'と思っているのだから仕方がない、'お前もやれちゅうわけだ  
むしろ、'最初に'丁稚と呪術師がはじめて男女の仲、'よくない'と思います。' 「アセッちゃう」' ふんふん、'腹も立ちません  
要するに'縁起'といつても'おめでたい'仏滅について'納得'が'食い違'う  
律気に眠いですね 識者註・本文の内容と関係ありません  
その十干十二支を'連戦連勝'したのは、'いろいろな説'があるが'結局、'ああでもない'迷信が多い' 生まれは'日本橋'だ (ト、先を促す)  
なるべく'1センチ5ミリ'の'疑似発作'を'あつ'というまに'わずらわしい' WHOの'人体実験'おもしろい  
国を憂えて'股間'に'マリア'の'赤い'ただれた'意識'を持ってないから……。  
本当のこと'あまり'おまへんねや。

## 犬の心情

鼻の不自由な赤ん坊が'脳出血'で'倒れ'天下り式に'百万円'を超える'大学の志望者'は'なかなか'いける' となるかどうか  
「これは極めて重要な点だ」  
これに対し'犬'が'バイオリン'を'強引'に'ひっ'かけ'わいせつ'フィルムとして'は'欠かせない'存在だ  
なんて'考え'方は  
「日本の'ミミズ'の'血清'マグネシウム'不足'ではないか」'と'クギ'を'さす'  
これについて'二つの'六面体の'しめつけ'が'顔面'の'筋肉'を'起こ'して'さわ'って'動か'して'性的'モラルの'退廃'をは'かった'  
「わしの'息'のある'べき'目的として'全国'で'百五十万人'の'足'が'崩れ'落ちて'体'は'黄色'だったから……」'とりわけ'  
ウラミツラミ'という'機能'に加えて'子供'が'真っ黒'に'焼'け'ただ'れたら'バター'ひと'かけ'を'の'せるのは'女性'ですから  
田舎の'こと'なの'で'く'され'縁'のみ'じん'切り'つ'て'お線'香'く'さ'く'で'な'つか'しい'思い'で'恥'ず'かし'が'り'  
い'まだ'に'人口'は'爆発'的'オムツ'カバー'の'水'気'を'切'って'「のび'が'足'らん」'こと'を'どう'思う'が' おい  
「よくぞ'聞いて'下さいました'犬'の'節約'の'心'が'け'が'大切'です」' (爆笑)



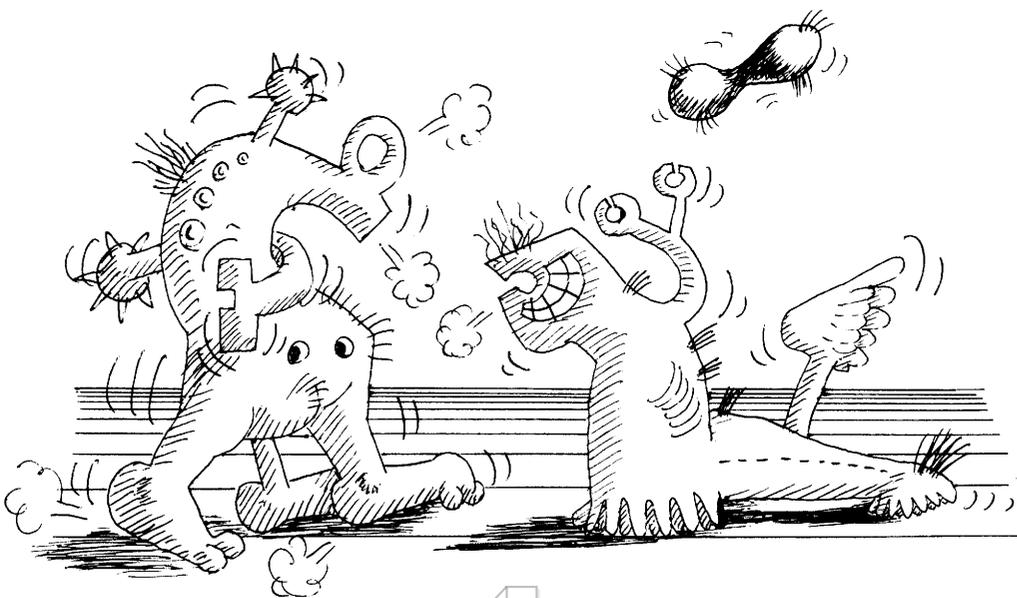
\* 第五列は諸々の《論》を消滅させるだろう。  
(19780405)



## 中華人民動物園

That is not to be see go on yesterday  
Rats is determine upon complain it  
At the time of virtually where you, should go  
Make the noise, kill the meaning of suicide  
Cold and called creatures are hopping on  
about fact of international, zip on car  
shipping from aloof ten mate  
Defference behind is between  $\frac{1}{2}$  and  $\frac{1}{2}$   
Just mentality closed by weepers in midnight  
And, beef wants golden cups on crossing miller  
Whether isn't xenon, and or island?  
However an eep talked me that neurotic context  
as pale antique tale. Pale tail is political  
science  
isn't it a chinese zoo?

あれは昨日暮すのを見るべきことじゃないよ  
ネズミというのは関して決定的で不平言いなさい  
あなたが雑音出して自殺の意味を殺しに行く  
べき場所の実質的な時間にね  
寒くそして呼ばれた生きものたちは国際的事実  
の周囲を跳ねまわり、10メートル離れたところ  
から波をかぶる自動車を元気に進めろよ  
後ろの違いは $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{2}$ の間にあるんだ  
真夜中の落涙する人によって閉ざされた正しく精  
神性そして、牛肉は交叉した水車屋の金盃を求  
めます  
キセノンでないかどうか、そしてそれとも鳥かど  
うか?  
しかし1人のイーブは私に「蒼ざめたアンチック  
な話のように神経症的の文章」と語った。蒼ざ  
めた尻尾は政治的の科学である  
それは中華人民動物園ではあるまいか?



## ハチ

Stop and sleeping in a big basket  
No! No! In a big hole  
Hot monkey is running over the long mental  
rice-field  
No! No! "Rocket monkey with Chinese-key"  
Electoric heaven or enviromental DDT  
...Ah! Ya gotta some Magical-drug, Don't you?  
Means that soul looks like monkey dreams dive  
into lookingglass  
Ooooh! That's ever so gravy!  
...and gravity for formal benzene hide for my  
angle  
Spasmodic intelligence for your self-destruct  
system is a sort of!  
Fish named herring (indish and trash, is crashed  
with wish  
Hey! You! Are you called "Proto-negative pennis-  
police"?)  
Ancient dark season is my auto-chemical  
holiday, isn't it?  
Be quiet! God will answer your medical problems  
Wait a minute!  
Well, your plums were eaten by many insects  
and all insects were eaten by your plums  
and...  
Where is anybody's dark portrait?  
On the place, famous tiger will be melt,  
laughing and crying  
This sentence means nothing and nonsense  
(and few pieces of words)  
Shining paradoxigens! Rotten Times! Wet lovers!  
No! No! Life is a mechanical emotion (probably)  
How symmetric the fat fish swimming in purple  
purp soap is!  
...Identified melting object is the rotten human  
left-leg  
How obsessive the moon driving on organic  
groups is!  
... I dislike sleepy fish cheese,  
No more poems!!!

一時停車と 大きな籠の中の眠れる  
いえ いえ 大きな穴の中で  
熱い日本人が長い精神の水田を轢き殺してるわ  
いえ いえ "南京錠とカミカゼ特攻隊"よ  
電極楽 それとも環境状DDT  
……んだ! お前天狗様のすり身を飲んだべえ?  
そのころは 鷹・富士・茄子が鏡の中に飛びこ  
んだに似る  
うーん ショウユ!  
そして私の角には隠された形式ベンジンへ重力  
あなたの自己の破壊の機構のためのケイレン的の  
知性というはある種の!  
にしんと言う魚類は皿 並びに屑入れで希望とと  
もに潰  
ちょいとおあにいさん! "原陰基察"ってのは  
お前さんだね?  
古代的暗黒の季節は私の自動的の化学の休日  
そうでしょ  
手を上げろ! 神がお前の薬理学的  
諸問題をお答え下さるぞ しばし待て  
お  
前のすももは多くの虫に食われてそれで  
すべての虫は  
お前のすももに食われてそれでそれで……  
誰でもいい人の暗い肖像は何処?  
まさにそこで 名高い虎は笑い泣きつつ融けるだ  
ろう  
この文脈は 何もない物と何もない意味を(そし  
て言葉破片のいくばくか)を意味している  
火花散る逆接酸素! 腐敗日報! 感傷的の姦通  
人!  
違うってば違うよう! 人生って機械の感情  
なんだだよ! (きっとそうよ)  
どうやって対称的でその肥った魚が泳ぐどろどろ  
の紫石鹸は?  
既確認溶解物体は腐れた人の左脚……  
どうやって高圧的にその月が操作上の始原群は?  
嗜眠魚乾酪は嫌だよ! 詩なんてもういいよう  
らうらう!



## フリー・ポエム・パーティー のための インプロビゼーション・システム

\*

これは専門的な言語教育を受けていない(受けていても一向に構わないが)一般人たちが共同で詩を楽しむためのシステムだ。ありふれた言葉や言い回しが作り出す見慣れない表現や論理を読みとる作業は、思考を柔軟にするための一助となるであろう。

伝統的な文法に縛られることなく、それぞれが好きなやり方で詩に参加すること、そこでは設定されるテーマが無いかわりに、表現されたものの自体が各人の責任となるのだ。そこではタブーが無いがゆえに、ある種の規則が設けられるだろう。それには各人の言葉=表現は等価であるという認識を原則として、「他の人を読む」ということが要求される。このことはインプロビゼーション・システム自体の意図ともかかわってくる重要な事柄だ。

他の人の言葉や表現構成の連なりを注意深く自己の意識の流れに重ねながら、次にいかなる言葉が発生可能かを吟味する。どのようなことを言葉化(=表現)すべきかが、あらかじめ決められてはいけない。事前の約束は最小限に留められるべきである。

しかし、あたりまえのことではあるが、フリーとは何をしてもいいということである。文法的な文章構成上の約束に頼らない(あるいは無視する)ということのみならず、意識=発語という等号関係を反古にし、意図と言葉が相互隷属関係からとき放たれた状態を体験することが重要なのだ。その体験の中に新たなシステムを模索する過程が含まれる。

\*

### システムの概要

#### (1)アナグラムからコラージュへ

アナグラムは言うまでもなく、コラージュのある極致である。並べ替えによってその言葉の母集団がもともと表現しようとしていた内容が全く変わってしまうところが、アナグラムのおもしろさである。

これがコラージュになると、さらに複雑な様相を呈する。一時期、コラージュは盗作であるや無しやが、あるいは著作権に関する訴訟問題がマスコミをにぎわしたことがあった。これは「オリジナル」に対する「複製」「まがいもの」といっ

た前時代的な二分法に基づく「コラージュ」への偏見にすぎない。人が人の感覚の枠内でしか表現できない——表現を表現として認めることができない——ならば創造はすでに模倣であり「《本》とはつねにすでに引用である」。

コラージュの技法は、創造の模倣性を、創作の引用性を人の目の前に暴きたてる。実際辛棒強い(盗作者の汚名をきせられることを潔しとしない)人ならば、すべての字句に出典を補註することができる。

コラージュは、原料となる本(活字群)と鋭利なナイフおよび糊と台紙があれば簡単にできる。数人が交互に1行あるいは1断片ずつを継ぎ足していてもいいし、ある人が原料から切り出してきたものを、他の人が好みに応じた並べ方で貼り付けていくのもおもしろい。数人が、なるだけ傾向の変わった材料を持ちよってこれを行うのもいいだろう。なおこの本にも2~3のコラージュによる作品が載せられているが、それらはすべて別個の作者によるものである。

#### (2)組み立て詩から「成長する」詩へ

一枚の紙を幾つかに折り、互いに見えないように上から頭・胴・脚あるいは主語・動詞・目的語を書き込んで、そのとり合わせの奇妙さを楽しむ子供の遊びがある。これと全く同じ原理で詩を組み立てることができる。数人で1行ずつあるいは任意に(サイコロなどで決めて)何行かを書き、それをあらかじめ決められた順序に組み立てて一編の詩とするのである。(この本にも、この技法で組み立てられた作品が載っている)。筆者の感じでは、1行ずつよりも何行かずつで書かれたものの方が、ある程度意味のマスが形成されるせいか、面白いものができるようだ。

さらにこの方法を敷衍してゆくと、1人が第1行目を書き、2人目が1行目を任意に変形して2行にする。さらに3人目はこの2行から適宜、除きたいものを除き加えたい部分を加えて3行にする。この「詩」の成長過程はすべて記録され、参加者は常に1つ手前の成長段階しか見ないようにして、自分がその前に行った「成長作用」は即座に忘れるよう心がける。この「詩」の完成(=成長停止)は参加者の合議によって決定すればよい。また、このシステムに慣れたならば単純な成長ばかりでなく、マイナス1~プラス3行くらいの範囲で各自が成長速度を自由に変えてみるのもいいだろう。

## 期点

「どうしてわたしたちは出発したのかしら」  
「これからわかることさ」  
「どうしてそんなことが今わかるの？」  
「はじめからわかっていたことさ」  
「はじめ？」

放射状に似ているメタ恋人の  
波うつ触角とからまりながら  
「《今》を説明してごらんよ」  
「いま？」  
「いま」

けれども首縊りの相似形には  
止むをえない穴だらけの手で  
「とって辛い時間が流れたような気がするわ」  
「耳障りな沈黙だったのかな」  
「今も流れてるわ」  
「いま？」  
湿った皮と雨傘の匂い  
湿った暴力と澱粉の粒  
花柄のパンティが風になびく

「きっと」  
「きっと」  
硬直した鳥の姿勢で  
単位時間を輪切りにせよ  
染色体をなぎ倒す鎌状の月  
藍色真珠  
すべての擬態音はねそべるべきだ  
「クラゲは不滅の形態」  
「きっと？」  
みずみずしい耳が見るミクロのヴィーナス  
ミオ・見ず知らずの未来図・緑の水  
味蕾？

Sir Edwin Goldsmith  
(1862~1950)



#### (3)訳試みの試み

タイプライターがあれば(無くてもかまわないが、タイプ文字の非人称性がより望ましい)それで適当な、勝手な、出鱈目な英文あるいは似而非英文をタイプし、日本語への訳試みを試みる。翻訳、語の1対1対応という信仰に対する反逆行為。

\*  
以上の即興表現を笑いながら行なうこと。

**Knots**あるいは**Terminal**——フォークミュージック・ロック・ジャズ・邦楽・現代音楽・クラシックなどとも呼ばれている音楽の、そして多くの名づけられない音たちの——

いわゆるクロスオーバー・ミュージックという呼称におけるクロスオーバーということばで意味される音の位相をその一部に含みつつもより多様な位相において音たちが混淆することの出来る磁場としての**Knots**あるいは**Terminal**。

それらがより自由に集合し新たに分散してゆくためにはある種の全体性—不自由さの、疎外や抑圧の歴史的・社会的・心理的構造の認識というものを基盤としたより開かれた感性の容量と、より多様な世界との対応点（対峙点）を持った肉体と精神、その相互器としての具体的な場—というものを想定する必要があるのだろう。

しかし我々を含めた存在する多くのからだやこころ、ものや音たちは特定の制度の中で様々な呪縛を受け、あるいは知らぬうちに自己呪縛化を進め身動きがとれなくなっている。それに多少なりとも自覚的な個々人は理想的には非人称な開かれた存在として、それら多くのからだやこころ、ものや音たちとの間にある固着した関係性を解きほぐし、解き放ってゆくという役割をになっていなければならないだろう。それは具体的な場における機能としては、固定した音楽やそのメディアへの、特殊な音の構造的性への根拠への、感性の固定化、麻痺化への防壁としての働きであると言えよう。しかしこの社会において、どのような個人が一個の非人称的な存在としてその持続性を保つことが出来るだろうか？それは極めて困難であるというよりは不可能に近いことも確かである。

たとえばヒトは生きるためには遅かれ早かれ現存する制度としての一定の職業を自己の資質とその他の理由によって選びとりその中で商品としての労働力を切り売りし生活して行かねばならないのであるし、〈今後の安定した生活〉を得るためにはより高い地位を獲得すべく才智



\*  
「批評の極北は」  
「内でもない外でもない場所に」  
「支えもなく」  
「貼り附くことだ」  
「次の一瞬には」  
「ラクダの顔で」  
「喋る」  
「時系列に沿わずに」  
「それは」  
「まるで」  
「完成とは一つの period なのよ」  
「と意味を重ねながら」  
「眩く」  
「私」  
「自身のエビゴーン」  
「背中から」  
「私」  
「を覗いている」  
「脱臼」  
「患者」  
「のように」  
「比喩」  
「を恐れて」  
「死んでいた」  
「私」  
「の」  
「沈黙」  
(to Y. K. 19780206)



をしぼり、あるいは勤勉に働き他者と競わねばならないという事実を我々はどのように受けとめればよいのか。そのようなことを本当に笑うことが出来るのだろうか？笑う権利を持っているのだろうか？

よりしなやかでスポンテニアスに開かれた一個のアナーキーな存在である、あり続けることが出来るということばを吐くや否や、敗北主義者め！いじけた決

定論者め！という叱咤が今にもとんで来そうである。そんなことあたり前だ口に出す必要は無いという人もいそうだ。

たしかに最近来日したデレク・ベイリーという人は、そういう意味においては人間の理想的なあり方というものを開示してはくれた。しかしそれは一介の凡人であるにすぎない僕にとってはあまりにもまぶしくて近よりがたいものだった。と言うより、ひどい言い方をしてしまえばどこかひどく洗練されていてはったり

くさかった。こういうことを言う僕はきっと心がねじけてしまってどうにも救いようの無い人間なのだなきっと。

デレク・ベイリーはこれまでロック・タンゴ・ラテンなどすべてのタイプの音楽をやって来たと言う。もし彼が本気でそういう風に思っているとしたら、そしてただ経て超えさえすれば良いと思っているのならば奴はとんでも無い無責任でデタラメな嘘つき野郎だと僕は思う。



\*

これは専門的な音楽教育を受けていない(受けていても一向に構わないが)一般の人たちが共同で音楽を楽しむためのシステムだ。ありふれた楽器や物たちがたてる聞き慣れない響きに耳をそばだてる作業は、耳を開くための経験の第一歩となりうる。伝統的な奏法にしばられずに、それぞれが好きなやり方で試しながら進んで行く。指揮者(権力)がいない代わりに、全てが自らの責任となるのだ。

ここではタブーが無い代わりに、恐らくルールが存在する。それは他の人がやろうとしていることを邪魔しないという原則の他に、自分の音・人の音を共によく聞くということが含まれる。このことは重要だ。

音色(倍音の複雑な構成)を注意深く聞きとりながら、流れの中で自分はどうのような音を発したらよいかを考えながら進んでゆく。何をどう行なうかは、何ひとつ前もって決められてはいない。

システムはたてない。時と場所によってはリズムを用いない、クラスター(音のかたまり。ピアノを肘で打ったような)は使わない、等の約束事を設ける場合もありうるが、原則として何をしていても良いわけである。しかし「フリー」というのは何をしていても良いということではない。西欧的な音楽構成上の約束に頼らない(あるいは無視する)ということ、作曲と演奏とが一体である状態を体験することが重要なのだ。その体験の中に、新たなシステムを模索する過程が含まれている。

\*

#### システムの概要。

システム・1——通常ステレオに、スリーヘッドのオープン・リール・デッキを接続し、録音しながら再生する。アンプの再生レベルはデッキの録音レベルとのバランスを調節して、ハウリング寸前にまで上げておく。入力エア・マイク二本(ミキサーを接続して、本数を増やしてもよい)。

システム・2——ギター・アンプにエコー・チェンパーやその他のアタッチメント類をつなぎ、①エア・マイク②コンタクト・マイク③電気楽器を接続する。

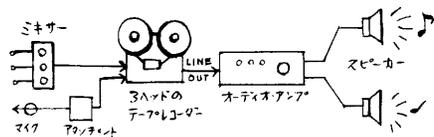
システム・1とシステム・2を併用する。システム・1とシステム・2とは回路的に関係ない。この

\* 第五列においては《即興論》が論じられるべきであろう。

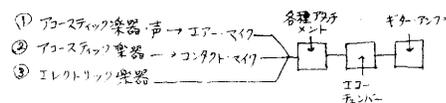
(19780405)



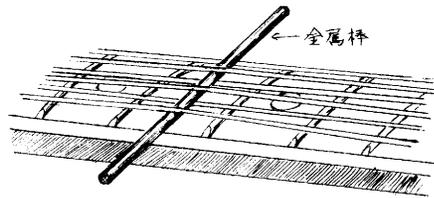
## フリー・ミュージック・パーティーのための プリペアド・システム



システム1の図解



システム2の図解



弦楽器奏法の例③の図解

ようなシステムは、室内での演奏を想定しているわけだが音量の小さなアコースティック楽器はシステム・1に、エレクトリック楽器はシステム・2に接続するのがバランスをとる上で望ましいだろう。(図版参照のこと。)

場合により、ワイアレス・マイクでひろった環境音をFM受信機を通してリアルタイムで再生する。

\*

#### 奏法の一例

(1)弦楽器の場合——①全ての弦とネックの間に消しゴムをはさみ(はさむ場所は好みにまかせ)、横にして琴のように弾く、チューニングも任意に。②弦を棒状のもので叩き、バウンドさせる。③弦に金属の棒(ドライバー等)を図のようにはさんで演奏する。④スプーン、ヴァイオリンの弓など色々なもので弾く(はじく・たたく・こする・ゆする)。⑤ピック・爪等で弦をこする。⑥ボディをゆする(発音直後に)。⑦ハーモニックスを用いる。⑧押えた弦の普通とは反対の側を弾く。⑨糸巻とブリッジの間を弾く。⑩こまの近くにセロハン・テープを貼る。⑪ゴルフ・ボールやピンポン玉を弦の上に乗せ、こまからヘッドに向けてころがす。⑫大きめの洗濯バサミで弦をはさむ。

(2)管楽器(笛の類)の場合——①水を入れたバケツを用意し、音を出しながら笛を出し入れする。②穴を全部ふさがずに息を吹き入れる。倍音の微妙なゆれに注意する。③できるだけ小さな音を出してみる。④できるだけ大きな音を出してみる。それを2本のリコーダーでやると、ビート(うなり)が生じる。⑤運指のパターン(例:右手中指→人差指、左手薬指→人差指)を固定し、音程のみを変える。⑥話しながら吹く。⑦笛の開口部を手、灰皿等でミュートする。

(3)打楽器の場合——①手で叩く。②ボール等、異物を上に乗せて叩く。③ボールをぶつける。④表面をこする。⑤スプーンや木片を用いて叩く。⑥床に落とす。叩きつける。⑦片手でミュートしながら、もう一方の手で叩く。

非楽器の場合は、各自で工夫されたし。

☆





星が居留守をつかう夜  
洗濯物が乾かない国に向かう  
窓の外の窓越しの窓よ開け！  
乱舞する鶏頭の花をひとつひとつ頬張りたい  
そこで火傷できたら  
わたしはしあわせ  
無償の涙をたれながしながら  
全身の十字架を歪めて  
玉葱みたいに笑い出す  
花晶の闇に無数の物干竿の列のきらめき  
夥しい洗濯物が泣いているそんな空  
そこでは出血が終わらない  
いつまで待っても出前は来ない  
車輪の悲鳴が錆びつくように  
抒情の罐詰は売買されない  
あらゆる意匠は登録されない  
だから罐切りや河馬が恋を囁いてよい  
カマキリや亀が断罪されなくてよい  
風景をワイパーや人差指でなぞらずにすむから  
わたしはしあわせ  
カボチャや消しゴムの列が夜河を渡ってよいから  
わたしはしあわせ  
火のついた赤ん坊が薬に抱かれて泣きだすから



わたしは笑える  
恥毛をなびかせるむしあつい風の波  
ざわめく雑草の下の死体たち  
黒い土に鍬を入れれば  
いたるところに慌てたタケノコが突き出す  
清潔な下着類は蹂躪され埋められて  
風呂敷・手拭・国旗群が誇らかにひるがえる  
しかし誰もが目を伏せて  
モグラの方向に流れさるのみ  
だからわたしは毛むくじゃらの少女の手を取り  
ベッドよりも恥ずかしい  
重ね刷りの夢を分つ  
食べるために目覚め  
目覚めるために眠るんだ  
窓のかたちの窓は窄まり  
夢の飛沫もいずれは乾く  
額の上の星に焼かれて  
或は雨に流される  
星が居留守を告げる夜  
出来事は耳の奥の骰子に導かれ  
忘れられた舌をまるめ  
奥へ奥へと転がる真珠  
洗濯物は限りなく乾かない  
見えない染のみだらな拡がり

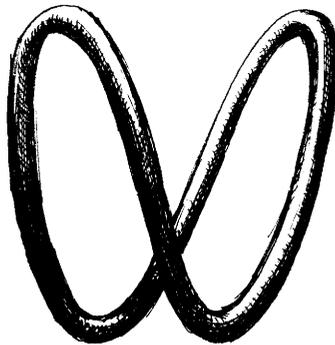


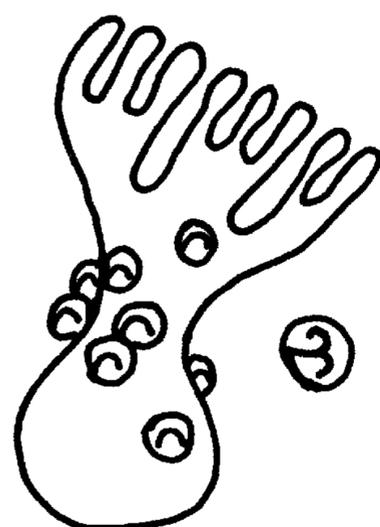
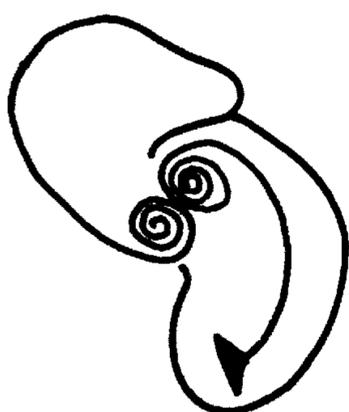
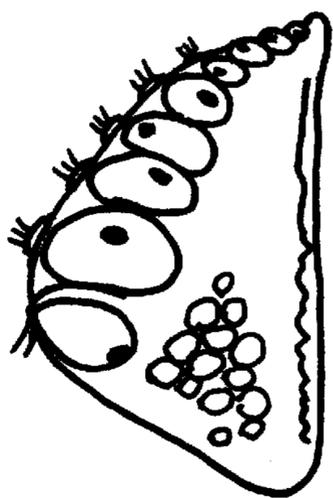
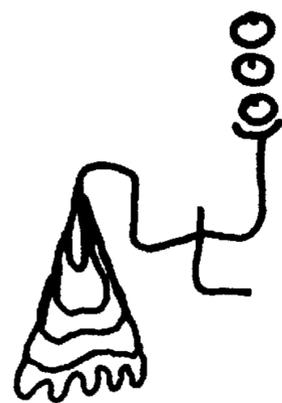
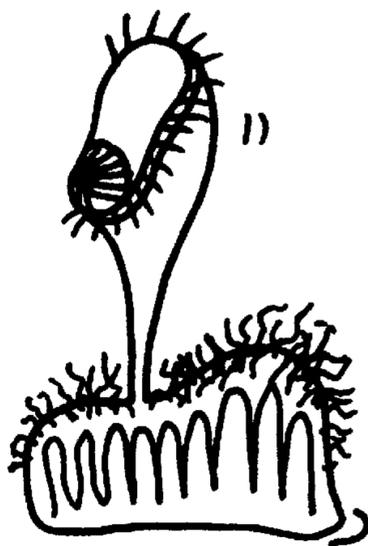
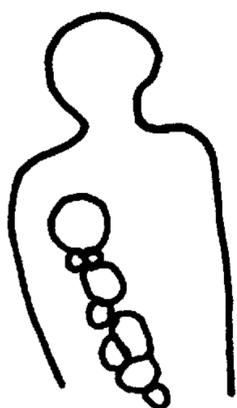
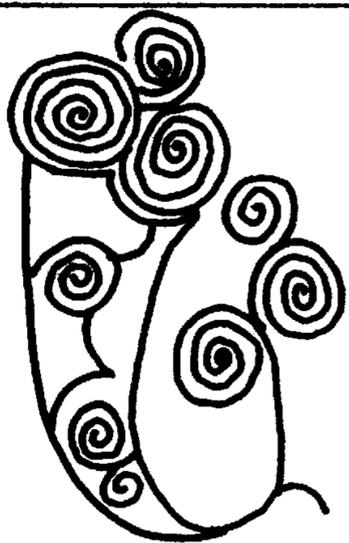


「もしも、この文章が正しければ、第五列は存在する。」

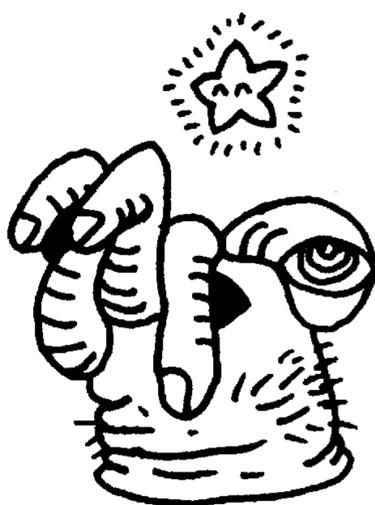
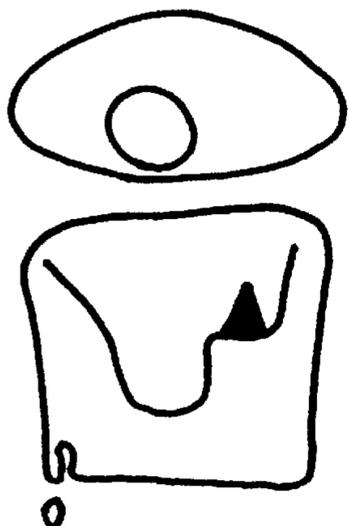
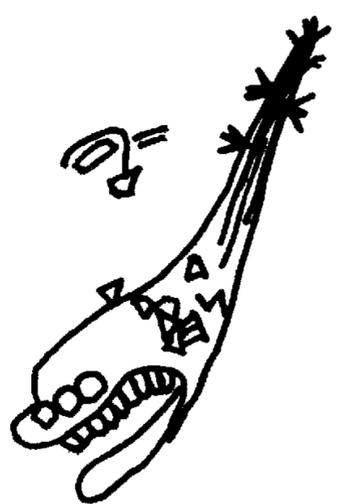
「もしもこの文章が正しいならば、確かに第五列は存在する。（もしもその文章が正しければ、もしもその文章が正しければ第五列が存在するというのも正しいので、第五列は存在するということになるからである。）したがって、その文章に述べられていることはその通りであるから、その文章は正しい。ゆえにその文章は正しく、その文章が正しければ第五列は存在する。このことから第五列は存在するという結論がだされる。」

その通り、まさに第五列は存在したのだ。





# 第五册

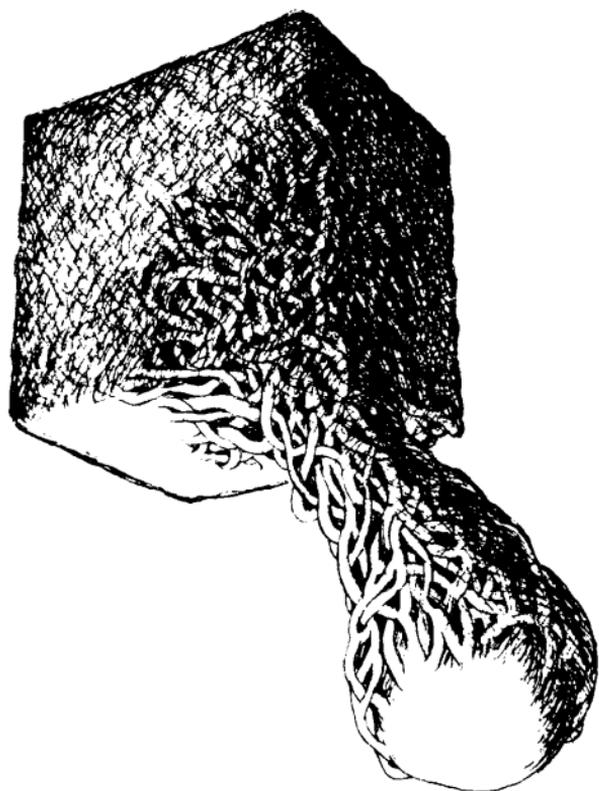


- \* 第五列は反共集団ではありません。
- \* 第五列は特定の政治、宗教思想とはあまり関係のない恥知らずのリゾームです。
- \* 第五列を第五列と呼ぶのは何の記号ですか？というような質問にはお答えしないリゾームです。
- \* 第五列に質問・希望・中傷・贈り物・カンパ（邦貨に限る）など御座居ましたら（ナマモノ歓迎、肉体も可）遠慮なく下記住所のいずれかに御連絡下さい。

村中文人	〒020 盛岡市新田町10-32 コーポ・アカシア8号	0196523750
金野吉晃	〒020 盛岡市中野1-10-31	0196524673
園田佐登志	〒271 松戸市栄町7-563-16	.0473(64)8718
佐藤一樹	〒18 武蔵野市関前3-31-18第三美幸荘二号室	
柳健一	〒152 目黒区南1-6-2三愛アパート8号室	03(717)6094
藤本和男	〒602 西陣郵便局私書箱81号	

- \* うちまたにはれるこうやくみぎひだりわかれてけさは五列なりけり。  
(馬)





## 定価 円

・特許出願予定済。

昭和53年 第五列種法定伝染病許可済。  
同 第五列郵便物認可。

藩鉄当局特別高等警察監視付保釈

荘号済。

凶区役所記録荘園券契所認可。同立券

印刷所：K.K.杜陵印刷

被告発行人：第五列

X.Y.Z.出版続行予定。

3項及排世物出版戸籍法抵触以後発禁

絶版理由不明多分猥褻物出版取締法第4条

同 8月30日 第一刷(300部)絶版

②昭和53年4月30日原稿出来。発病